

### 538 肝細胞癌52例の骨シンチの臨床的検討

上野恭一、島崎英樹<sup>1</sup>、松田博人<sup>1</sup>、大森俊明<sup>1</sup>  
(石川県立中央 放、消内<sup>1</sup>)

我々は、胃癌、大腸癌の骨シンチについて報告してきた。肝細胞癌では骨転移が少ないとされ、核医学的報告に乏しい。そこで、今回過去11年間の肝細胞癌の骨シンチを検討した。【対象】肝細胞癌52例(63回)(男38、女14例、31-81歳)【方法】Tc-99mMDP740MBq静注2-3時間後、東芝GCA901Aで全身シンチとspot像を撮影。骨シンチ所見と病歴、各種画像診断所見を比較検討した。

【結果】骨シンチで、骨転移12例(23.1%)、肋骨浸潤(胸壁転移)1、肋骨外傷1、腹水6、肝腫瘍への集積2、hot kidney 1、圧迫骨折2などが見られた。その他、単発性の病変で骨シンチのみでは、診断が確定出来ないものも見られた。【結論】肝癌の骨転移は、23.1%にみられ、予想よりは高頻度にみられた。また、肝腫瘍そのものや、腹水の描画が、他の腫瘍に比し、比較的多くみられ、診断上注意を要する。

### 539 肝細胞癌の骨転移における骨シンチ所見の検討

那須政司、鈴木 豊、大石こずえ、斎藤拓郎、遠藤じゅん、岩田美郎、松山正也(東海大 放)

肝細胞癌の骨転移は比較的経過末期に見られ、骨シンチグラフィ上、多様な形態を示すことが多い。当院の過去5年間の肝細胞癌600例のうち骨転移を認め、比較的病初期から経過観察することができた14例についてその臨床経過と<sup>99m</sup>Tc-MDP骨シンチ所見を比較検討した。

TAEは全例施行されており平均回数は3.5回。骨転移巣は椎体、肋骨に多く他は肩関節、下肢、頭蓋、骨盤に認められた。骨シンチ上高集積を呈したものがほとんどであったが、転移巣の増大と共に低集積化を示すものや病初期からあまり集積に変化を認めないものも少数ながら認められた。

しかしながら初期の転移巣の発見には<sup>99m</sup>Tc-MDP骨シンチは有用な検査と考えられた。

### 540 乳癌術後患者経過観察における骨シンチグラフィの有用性 —無症状骨転移例での検討—

中原 浩(プレストピアなんば病院)、陣之内正史、長町茂樹、二見繁美、Leo. G. Flores II(宮崎医大放射線科)

乳癌術後経過観察症例625例中、他に再発がなく、無症状ながら骨シンチで転移が確認された症例について検討した。症例は7例で年齢は41~58歳、病期分類はstage I 1例、stage II 4例、stage IIIa, bが各々1例であり、組織型は乳頭腺管癌1例、充実腺管癌4例、硬癌3例である。再発後早期に治療を開始した症例については比較的緩徐な経過をたどっているものの、治療の遅れたものに関しては急速に悪化した1例も認められた。

乳癌術後患者全例の経過観察に骨シンチを用いるか否かはcontroversialな問題であるが、stageの高い症例、ホルモンレセプター陰性の症例等に関しては骨シンチによる定期的な経過観察が必要と考えられる。

### 541 乳癌骨転移の頻度、危険因子の検討

—骨シンチグラフィによる検討—

小泉 満、山田 康彦、野村 悦司(癌研病院 RI)

乳癌骨転移の発生の頻度を調べ、危険因子の検討を行った。癌研病院で'88-'93に手術を受け経過観察をされている例で、両側乳癌および他の癌との重複癌例は除いた。診断法を一定にするため当院にて骨シンチを受けている患者に限定し、骨シンチ施行時の骨転移の有無を基準とした。症例数は2475例、検討期間は'98年3月までとした。検討因子は、年齢、月経歴、TNM, n, 病理組織型, ly, v, f, リンパ節転移個数, ER, PgRである。統計的方法は、Kaplan-Meier, Logrank, Cox 回帰モデル(単, 多変量)を用いた。骨転移の発生は0-8年の間は年間発生率約3%であった。組織型では、invasive lobular ca, scirrhous ca,に骨転移の発生率が高く5年以上経過しての骨転移の発生率に低下が見られなかった。最終的に危険因子としては(組織型を除く)リンパ節転移個数, T, M, fであった。

### 542 マウス骨髄増殖能と<sup>14</sup>C-methionineの骨髄集積について

今井康則、上島久正、吉川京燦、古賀雅久、吉田勝哉、村田啓(放医研) 岡田淳一(成田日赤)

前回我々は全身照射したマウスにG-CSFを用い、骨髄増殖能と<sup>14</sup>C-methionineの骨髄集積の関係について検討した。その結果照射10日後にG-CSFによって骨髄へのmethionine集積が有意に増加していることが確認された。今回はさらに照射後7日目における同様の検討を行い、G-CSF投与による骨髄の放射能集積増加を確認した。そして以上のデータから、さらに骨髄造血幹細胞数とmethionine集積の関係を検討した。文献的に求めた照射後7日、10日のG-CSF投与群、コントロール群の骨髄造血幹細胞数を各々の骨髄の放射能と比較した。細胞当りの放射能は両日ともG-CSF投与群の方が高かった。G-CSFによって骨髄造血幹細胞の分裂が促進されるだけでなく、methionineの取り込みも増幅されている可能性が示された。